

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



2002年10月号

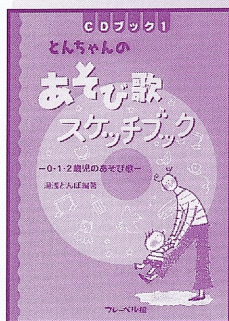


CDと解説書がセットになったあそび歌の決定版。
楽器から解放されて、子どもたちと思う存分「あそび歌」で
遊びたいという保育者の皆さんに贈ります。

CDブック①

とんちゃんのあそび歌スケッチブック

—0・1・2歳児のあそび歌—



湯浅とんぼ／編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

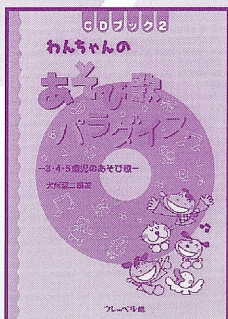
最新刊



CDブック②

わんちゃんのあそび歌パラダイス

—3・4・5歳児のあそび歌—



犬飼聖二／編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

最新刊



子どもとあそび歌を楽しむのに、ピアノ伴奏はあまりふさわしくありません。なぜなら、ピアノに向かっては、子どもの動きが見えないだけでなく、子どもたちと一体になって遊ぶことができないからです。

①巻は、著者が乳幼児のために曲を作り、実際に歌って楽しんだ15曲を収録しています。

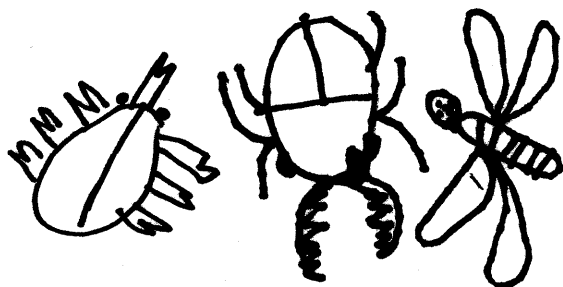
②巻は、著者が全国各地の遊びの講習会で、子どもたちといっしょに歌い踊った作品を中心に15曲収録しました。いずれも、実際の保育現場で長く歌い遊ばれてきた曲ばかりです。

解説書に、楽しいイラストで遊び方を分かりやすく紹介したので参考にしてください。

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第101卷 第10号



幼児の教育 目次

— 第一〇一卷 第十号 —

© 2002
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

巻頭言 幼保の一元化の精神とは何であったか……………小川 博久…(6)

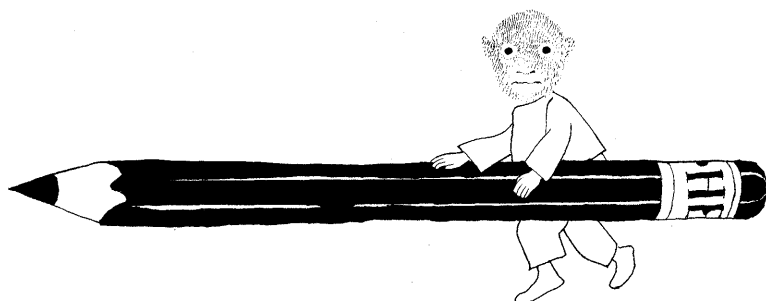
保育学文献賞を受賞して

私の研究の成り立ちとその周辺から—若い保育者たちへ—…高濱 裕子…(10)

子どものいる風景(1) 私がはじめて出会った冒険あそび場……………小林 美実…(18)

障碍をもつ幼児の保育(3)—この子と出会ったとき— 歩くということ その三

—歩きはじめのドラマから—……………津守 真・津守 房江…(26)



TO・NI・KARAひろば その四…………… 嶺村 法子… (34)

子ども時代と私(25) 追憶・追認・追想のあの頃…………… 亀高 京子… (40)

生きもの共存の畝間から(6) 雑草を観る、育てる…………… 徳野 雅仁… (46)

自分づくりを支える B男と私の二年間…………… 吉田 澄江… (48)

三木成夫といのちの世界 (三)いのちのかたち、いのちの波…………… 吉増 克實… (55)

表紙絵／佐々木麻こ

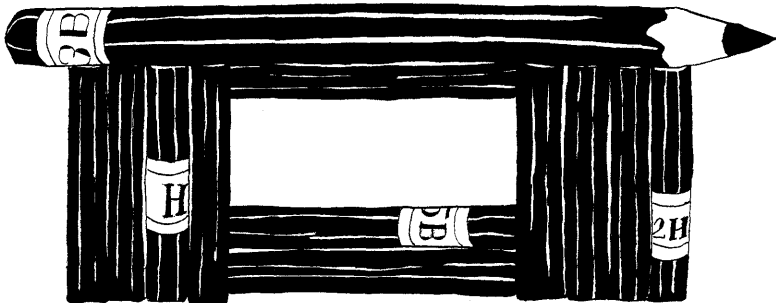
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ペン立て」

編集委員／田代 和美・梶田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



ある日

撮影・平野 清





幼保の一元化の精神とは

何であつたか

小川 博久

近年、公立幼稚園に襲つて来ているのが、幼稚園と保育所を統合しようという動きである。この動きのペースの早さは、公立幼稚園に勤める教師たちやこれまで幼稚園教育に盡力してきた私の友人たちをとまどわせている。

思えば、この幼保一元化の動きは大正十五年に公布された幼稚園令まで遡ることが出来る。当時の世情は大正三年に始まる第一次世界大戦によつて世界

各国に様々な社会問題が発生し、特に婦人と児童への関心が大きくなり、社会運動として発展するきっかけになつていたのである。いわゆる大正デモクラシーの発生である。こうした状況の中で大正九年頃から児童保護の問題が大きくとり上げられ、託児事業が話題となり、大正十年には児童保護週間が設けられ、日本幼稚園協会主催の児童保護宣伝の催しが行われ、協会は託児所保姆の養成を考えようとし



た。そして大正十二年京浜地区は関東大震災に見舞われ、多くの幼稚園がこの災害に遭った。これは幼稚園にとつて大きな痛手であったが、このおかげで幼児の保護は緊急に必要という認識から、託児所の急造など積極的保育事業対策が発足した。

この動きは大正十五年の幼稚園令発布につながつたのである。その中で重要なのが幼児教育と社会事業としての幼児保育の一元化である。ここでは、幼稚園を一部上流階級の専有物にせず、その社会的機能を發揮させるために、幼稚園令の条文は次のようになつてゐる。

まず第一条に「幼稚園ハ……家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」とし、第二条で「市町村、市町村学校組合及町村学校組合ハ幼稚園ヲ設置スルコトヲ得」、その際、「費用ノ負担ノ為学区ヲ設ケルコトヲ得」として、第六条で三歳以上の就園としながらも、「但シ特別ノ事情アル場合ニ於テハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ三歳未満ノ幼児ヲ入園サシムルコトヲ

得」とし、さらに「幼稚園令及幼稚園令施行規則制定ノ要旨並施行上ノ注意事項」では、幼稚園設置の必要を説く箇所で、「父母共ニ労働ニ従事シ子女ニ対シテ家庭教育ヲ行フコト困難ナル者ノ多数居住セラル地域ニ在リテハ幼稚園ノ必要殊ニ痛切ナルモノアリ今後幼稚園ハ此ノ如キ方面ニ普及發達セムコトヲ期セサルヘカラス随ツテ其ノ保育ノ時間ノ如キハ早朝ヨリ夕刻ニ及フモ亦可ナリト認ム」とし、三歳就園が原則だけでも「特別ノ事情アル場合ニ於テハ三歳未満ノ幼児ヲモ入園セシメ得ルコトトセリ」とある。

この省令の目的について大正十四年の東京朝日新聞はこう述べてゐる。「この新令の発布は別に強制的という意味ではなく、ただ勅令をもつて画一を図ることになるらしい。当局としては、現在の託児所をいままじ組織的に、幼稚園をもつと一般的なものとして、将来は両者を合体したものを幼稚園と称せしめようとの希望である。こんどの改善の焦点は保

姆の資格を向上せしめて対世間的信用を高め、これが待遇を改善して恩給年功加俸の規定を設けるのが幼稚園改善の第一歩と云われている。幼稚園を少なくとも現在の小学校と同様に全国的に普及せしめこれに相当の資格を与えることも急務とされている。」とある。幼稚園令の公布によって幼保の一元化は十分に実現されなかったが、教育上の重要な論議となつたことはたしかである。

幼保一元化の新たな動きは昭和二十一年日本教育会保育部会による幼稚園令の改正、幼稚園保育の義務制度化・保育施設の一元化の提案であり、ここには、幼稚園教育の先達である倉橋惣三や保育所保育の指導者木戸幡太郎の願いも反映されている。

しかし結果的には、教育基本法・学校教育法の制定と共に幼稚園は学校体系に組み入れられ、それまでの「家庭保育ヲ補フ」という箇所は削られたのである。同じ昭和二十二年児童福祉法の制定によって保育所は厚生省の所轄となり二元化が制度化された

のであった。

しかし、幼児を保育する上でこの二つの施設が基本原理を異にすることは本来許されるべきではないとする関係者の熱意は残っていた。

昭和四十年代の終り頃、幼保一元化を自力で実現しようと北須磨保育センターに守屋光雄氏を訪問したことがあった。その折、幼保一元化を実現するための努力をるる伺ったことがあった。幼稚園施設と保育所施設を隣接して設計した段階から、市役所の当局者からの違法建築の疑いがあるという再三の圧力をどうくぐりぬけたか、保育者の労働条件や保育時間の平等性をどう確保するか、保育研修の時間をどう保障するか（特に保育所）といった工夫を聞いて、先駆者の努力の並々ならぬものを感じたのであった。

しかし、バブル時代の中で幼保一元化の論議は保育学会でも問題にされることは少なくなっていた。ところが、この所、幼保一元化の動きは、保育

の理念とは全く無関係に、その是非論をはるかにこえて、現実の動きとして急速に表れてきた。一つは、バブル経済の破綻と共に、地方自治体の財政赤字が表面化し、中曽根内閣以来の民間活力の導入という小さな政府の政策、それに少子化対策として登場したエンゼルプランと称する「子育て支援」の運動などの背景から生じたものである。これらの政策とその背景は、幼・保の一元化を加速化させ、施設や人材の有効利用、財政の健全化といった動きを加速化させ、あれよあれよという間にそれが当然であるといった地方自治体の当局の姿勢が生まれた。

財政面からいってこの動きを停止すべきだとはいえない。しかし、一〇〇年以上もある幼児教育（保育）の歴史の中で、幼稚園と保育所はかりに同じ基本原理にたつと仮定しても、各々の職場の実践がくり上げた保育文化の相違は小さくない。この実践に参加してきた保育者たちが、二つの文化の統合に向かつて歩み出し、それを一つにして、その環境に

適応し、心地よく仕事ができるようにするにはそれなりの時間が必要である。そこに子どもの立場に立った教育的な理論に基づく、一元化への工夫も出てくるだろう。財政面からの一方的一元化の施策は、これまでの歴史的な一元化とは全く異質で教育理念への正当な配慮がみられない。それはすなわち、現場の保育者の立場や子どもの立場をふみにじる態度でもある。地方自治体の当局者のこのような問答無用の一元化論は、日本の教育国家としての品位の無さを反映するものでしかない。もつと歴史上の一元化論にみられるような保育者一人ひとりの思いや幼児の立場に立って一元化のプロセスを考えていくべきではないだろうか。（日本女子大学）

参考文献

津守真、久保いと、本田和子共著『幼稚園の歴史』恒星社厚生閣、昭和五十一年、第七版 一九七六年

保育学文献賞を受賞して

私の研究の成り立ちとその周辺から

— 若い保育者たちへ —

高濱 裕子

この四月から現所属校に勤務しています。移籍からまもない時期に、思いがけない日本保育学会保育学文献賞受賞のお知らせをいただきました。私は平成の年号とともに研究の道を歩みだしていますから、今年でもう十四年になります。中年の大学院生であった私は、いろいろな局面で年齢という壁に突き当り、後戻りしそうになることがあります。それでも多くの人たちの援助によって、自分のやりたいことに取り組ん

でこられたと感謝しています。受賞対象となった『保育者としての成長プロセス』（風間書房）は、十年あまりにわたって取り組んできた研究をまとめたものです。本稿では、この本を構成する十一の研究に取り組む中で気づいたことや考えたことなどをまとめてみたいと思います。この時期はちょうど人生の転機ともかわっていますので、私的な内容に触れざるをえませんでした。最初にこのことをお断りしておきたいと思

います。

授与式での感慨

五月十九日におこなわれた保育学文献賞の授与式で、なつかしい津守真先生（日本保育学会会長）や森上史朗先生（同副会長）にお会いすることができました。なつかしいというのは私の個人的な感慨ですが、これには次のようないきさつがあります。

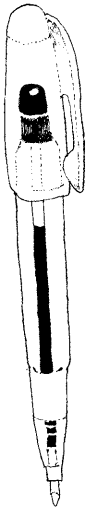
かつて、私は盛岡市にある公立幼稚園に勤務していました。昭和六十三年六月に岩手県国公立幼稚園協議会と盛岡幼児研究会の共催で津守真先生をお招きしました。当時の記録によると、この幼児教育講演会への参加者は二百六十名でした。講演会の後には有志とともに夕食をご一緒する機会もありました。授与式の舞台の上で、その場面が鮮やかによみがえってきました。その頃、森上先生は文部省初等中等教育局の幼稚園課教科調査官として指導的な立場にいらっしやいま

したから、お話をうかがう機会は何度もありました。

標記の『保育者としての成長プロセス』は、お茶の水女子大学に提出した学位論文を、平成十三年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の補助をえて公刊したものです。学位論文の提出や審査のプロセスでは、予想もしなかった父の死というできごとにも遭遇しました。私の人生の中でもかなり大きなできごとが続けて起きたせいか、その時の記憶を連鎖的に想起してしまいます。

幼稚園教諭をめざしたいいきさつ

私は現在、乳幼児と親、そして幼稚園や保育所の保育者とその関連領域を研究分野にしています。これには父の影響が少なからずあるのかもしれませんが。



高校三年生の時、受験する大学の選択肢に短期大学の保育科も含めるように勧めたのは父でした。「これからは、幼児教育がとて重要になるぞ」というのです。この年は安田講堂事件のために東京大学の入試が中止になり、その余波が地方の大学にも及んできました。結局、唯一合格した保育科に入学することになったのです。

さて入学後に保育実習が始まり、私は「子どもって何て面白いんだろう！」と思いました。今でも「子どもが好きですか？」と聞かれれば、ちよつと困りません。嫌いではありませんが、手放しに好きとはいえません。でも文句なしに面白い存在なのです。子どもはこちらの思うようには動いてくれません。期待を見事に裏切ってくれます。「やられた！」と思うこともたびたびです。子どもの面白さのとりこになり、やがて子どもについてもっと知りたいと思うようになりました。

ドクターストップがかかったせいで、私は入園の決まっていた幼稚園にいけませんでした。弟たちの通う幼稚園に魅力を感じた私は、ある時期幼稚園に入り浸っていました。この頃から、すでに幼稚園とのつながりがあったのかもしれませんが。

保育の仕事が続けるためにはもっと学びたい

その後家政学部の児童学科へ編入学し、卒業後にはかつて学んだ短期大学の付属幼稚園に勤務することになりました。若さゆえの失敗は数々あります。熱心さのあまりこちらの考えを押しつけてしまい、保護者の反発を招いたこともありました。保護者の立場にたつてその心情を理解しようとする構えに欠けていたのでしょう。私自身の年齢が増えるにつれて、保護者会も恐怖の対象ではなくなりました。やがて、家庭では見ることのできない子どもの姿をできるだけ伝えていこうと心がけるようになりました。

保育所の先生方と意見の一致をみたことに、「子どもの最もよい場面を見ているのは、親ではなく保育者なのではないか」ということがあります。日々の子どもとの生活では、ほんの小さなことでも少し前に進んだ（何かができたということではありません）と実感できれば、明日からの生活に楽しみや期待がもてるでしょう。そのような様子を伝えて、保護者の子どもを見る視点を広げたり、子どものもっている多様な姿に気づいてもらうことも、保育者の重要な役割だと思っています。

さて、私は日々の保育がうまくいかないことを感じ始めていました。ある程度のことをこなせるようになって、も、「何かが違う」という感覚を払拭できないのです。保育の仕事が続けたのですが、この先ずっと続けていくためには「理論的なことを含めてきちんと勉強しなおす必要があるのではないか？」という思いも強くなってきました。それは中堅と呼ばれ

る立場になって、若い保育者への指導場面が増えたことも関係しています。自分のための勉強が必要なのに、後輩たちにはアドバイスを求められるという状況はかなりつらいものでした。「何とかしなければ……」と思うようになりました。

私は観察者？ それとも保育者？

大学院に入学を許可され（気持ちだけは熱かったのですが、結果は散々でした。よく合格させてくれたと思います）、大学の附属幼稚園に観察にでかけることになりました。現職の時はほかの人の保育を見たいと思っても、自分の所属する幼稚園を休みにするか、他の人に保育を代わってもらわなければ難しいことでした。これは願ってもないチャンスが到来したということです。三月までは現職だったという自負もあり、観察記録はバッチリ取れるだろうとたかをくくっていました。ところが、そう簡単ではないことがすぐにわか

りました。まず、記録が現実の展開に追いついていきません。でも、これは時間経過とともに解決されていきます。

実はもっと大きな問題が二つありました。ひとつは観察者に徹しきれないということです。子どもの動きにつられてつい出て行きそうになったり、知らず知らずのうちに子どもたちに問いかけたりしています。ハッと気づいてその場所から退き、自分で自分の動きをセーブするありさまでした。観察者としての自分が保育者としての自分をモニターしようとするのですが、制御しきれないのです。身体の方は十年あまりの保育行動をしつかりと覚えていて、無意識のうちに保育者として動こうとしたのでしょうか。

保育行動が違うのはなぜ？

二つ目の問題は保育行動の違いでした。保育者としての私ならここでは介入するという場面で、担任のS

先生は子どもたちを見守っています。逆の場合もあって、私なら出て行かないという場面でS先生は積極的
に介入を試みるのです。「なぜなのだろう？」と考え始める
と、よけいにわからなくなるのでした。

保育行動の違いに関しては、ある時解決策を思いつ
きました。それは実に簡単なことで、S先生に直接お
聞きするというものでした。「あの時、先生はなぜ見
ていたのですか？」、あるいは「先生があの場面で介
入したのはなぜですか？」という具合にです。

このことが、研究者としての私の保育に対するスタ
ンスを決めていきました。不思議なことに、保育の世
界では当事者不在の批判がしばしば行われています。
例えば他の人の保育を見せていただいた後、その日の
保育をめぐって討論になります。その時に「こうある
べき」というご自分の意見をいきなり述べる人がいま
す。まず当の保育者の意図、つまりどういうつもりで
そうしたのかを聞く必要があります。はたから見ても納

得できないとしても、当の保育者の話を聞かずに批判すべきではないと思うのです。その保育者がそのつもりで働きかけたとしても、スキルの未熟さゆえに思ったようにはいかなかったということもあるからです。人間が考えていること、実際にやったこと、そしてその結果（効果）は、必ずしも一致しないものです。

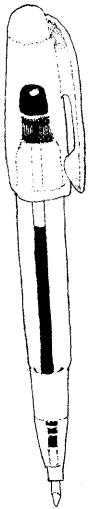
保育者のかかわりと子どもの状態

研究者の立場になって気づいたことに、保育者が考えている以上に、子どもは保育者とのやり取りからえたことを取り込んでいることがあげられます。保育者が実際にやっていたことを、数日たってから子どもたちが再現している場面に出会いました。その場にいるのは子どもだけです。保育者は知る由もありません。また、子どもの側で観察することによって、子どもの論理がとてよく理解できるようになりました。

子どもなりに考えたり、試したり、決断したりした結

果が、突然ボツと保育者の眼前に示されたとしても、それまでのいきさつを知らない場合、保育者は中立的になることさえ難しいようです。しばしば子どもの行為は否定的に評価されます。遊びのうつろいややすさが問題にされますが、子どもはうまく遊びたいし、仲間と仲良くしたいし、面白くしたいと動機づけられているのだと思います。だからこそ真剣に取り組み、本気で怒り、全身で表現するのでしょう。

その子どもの立場で考えることは、個人と集団の問題にもかかわってきます。その子どもの立場を理解したうえで、保育者がどのように対応するかが問われます。子どもの立場を理解したとしても、ここでは他児のことも考慮してほしいと願えば、保育者の対応は決まるでしょう。当の保育者はそのプロセスをきちんと



説明し、その上でどうあるべきかを議論すればよいのだと思います。

子どもの発達とその現場に立ち会うこと

私の研究は保育者と幼児の関係性の変化をとらえることも目的のひとつですから、必然的に少なくとも一年間、最も長い子どもでは三年間の追跡研究をいたしました。その結果、一人一人の子どもに発達のドラマがあること、そしてそのプロセスに保育者がかかわっているということを再認識しました。その子どもなりの発達課題もありますが、その中で子どもも保育者も成長していく姿がありました。時期の違いはあっても、どの子どもにも乗り越えてほしい課題が出てきます。保育者と子どもが一緒に歩むそのプロセスに、役には立たないけれど邪魔もしない観察者（私の観察の基本的態度です）として立ち会うことで、保育者の立場からは見えにくい保育の場のダイナミクスを、非常に強く

感じ取れるようになりました。

観察を受け入れていただいた場合、保育者との話し合いの中では私の気づきも率直に伝えるようにしています。観察を通しておつき合いするプロセスでは、お互いにうまいことばかりではなく、不都合も起きてきます。その不都合が実はとても厄介な問題で、すぐに結論を出せないこともありました。そのほかにも園全体の運営やクラス経営のこと、観察対象児以外の子どもものことなども相談のテーマとして持ち出されます。求められた時には、できるだけきちんと応えるようにしようと心がけてきたつもりです。

保育者は「へたにことばをかけると、子どもを傷つけてしまう」と消極的になりがちですが、もつと子どもたちを信用して思い切った保育行動をとることも必要なのではないでしょうか。保育者が常に完璧であるはずはなく、またある子どもにとって適切なかかわりが他の子どもには適切でないということもあるので

す。むしろ保育者には、自分がかかわった結果を読み取る敏感さが求められるのではないのでしょうか。「まじかっつた」と感じたらいさぎよく退けばよいのです。

保育者を支援する体制とこれからの方向

保育がうまくいかない、適切な保育行動が取れないという場合、その人の適性や能力が取りざたされるのではないのでしょうか。「保育者に向いていないのでは？」とか「能力的に無理なのでは？」と批判される可能性が高いでしょう。でも本当にそうなのでしょう。

経験豊富な保育者が一定レベルの保育をすることは、周知の事実です。しかし経験を積み重ねても、誰もがそうなるわけではありません。経験を積んでも成長しない人、要するに停滞している人がいることも私たちは経験的に知っています。「経験って何だろう？」「そして「経験によって、何がどう変化するのだろうか？」ということが、私の主要な研究テーマでし

た。保育者の適性が、しばしば「子ども好きで明るい性格」のレベルで語られることに納得できなかったのだと思います。人柄だけで語られるうちは、専門職とはいえないのではないかと考えています。

私の研究からは、保育者の経験年数によって関心を向ける課題が異なることもわかりました。保育者の発達によって、保育のメインテーマは変化します。そうであれば、研修のあり方と内容を検討する必要があります。つまり保育者のニーズに合わせて、継続的に、経験に応じて対応することが求められているのです。

保育をめぐる問題が、私が養成教育を受けた頃よりずっと複雑になっています。これからも子どもの成長にかかわるいろいろな立場の人たちと知恵を出し合い、より難しい課題に向かっていくことを求められる若い保育者への援助を続けていきたいと考えています。

(梶山女学園大学)

子どものいる風景(1)

私をはじめて出会った冒険あそび場

小林 美実

一九七一年の夏、私はデンマークのコペンハーゲンの友人の家に滞在していた。まだドイツが東西に分れていた時である。ここから東ベルリンに入るための航空便の確認に手間どっていた。おかげで、思いがけず自由な時間ができた。嬉しかった。

友人の夫はデンマーク人で、小学一年の女の子、キャティがいる。両親が朝出勤してしまうと、夏休

み中の彼女は、さっそく私を近所の気に入りの公園に誘った。日本語もできるキャティは、大変心強いパートナーである。さっそく出かけた。この辺りはコペンハーゲンの郊外の新興住宅地で、どの家も広い敷地と広い平屋で、大きな窓には綺麗なレースのカーテンがかけられ、庭には花がいっぱい咲いていた。十分程歩いて行くと、妙な場所に着いた。それ



は低い土手に囲まれた建設資材置場の様な所で、その一角には粗末な木の大小の屋根が見える。奥の方には、石炭ガラらしい小山もある。木造の粗末なゲートを入ると、さっそくキャティは古自動車は何台も無造作に置かれている所に走って行って、子ども達の遊びに加わった。私はしばらくこの場所がどういう所か、見物することにした。

まず初めに、子ども達が面白そうにすべり下りている石炭ガラの小山へ、ずるずるすべりながら登った。そこから広いこの場所の全景がよく見わたせた。建設資材の残り物の様な廢材の山、その横には何とも奇妙な大小の小屋が無秩序に建っている。よく見ると、男の子達が未完成の小屋にとりついて、自分の家づくりをしている。出来上ったらしい家の屋根の上にまたがって、囲りを見まわしている子もいる。動物達がいる場所には、沢山のうさぎの入った箱型の小屋があり、青年と数人の子どもが掃除し

ている。杭につながれた七頭の山羊のうち、角をもった大きい山羊と一人の男の子が、力くらべをして押しあっている。その横を、あひるの群と、二匹の大きな犬と一緒に歩いている。古い大木を組み合わせた大きなジャングル風遊具は、その中央に大きな布の袋がさがっていて、それに乗った子ども達が、布をゆらしてはしゃいでいる。

平屋が一軒あるので行ってみると、そこは工作や作業用の道具・機材の収納場所で、机の囲りに数人の青年がいた。プレーリーダー達だった。ここで私は初めてこの様な冒険公園やガラクタ公園と、そこで働くプレーリーダーの存在を知ったのである。彼等の動きを見てみると、ほとんど子どもに指示したり、注意したりしない。火を燃やしはじめた時もないの間にかそばに来て、時々必要と思う時に手をかす。ことばが少ない。うさぎ小屋などの掃除も、彼等がやり出すと、子ども達が一緒にまねて掃除する

のだと言う。上半身裸だったりしてヒッピー風だったが、やさしい静かな青年達だった。

この様な公園、つまり訪れさえすれば、すぐ楽しく遊べる遊具が用意された整った公園とは全く違う公園では、子ども自身が遊ぶ物も遊びも、遊ぶ楽しさも、工夫し試し考えて創り出さなくてはならない。しかしそれが面白いらしい。コペンハーゲンには、この様な公園が市内にもあると言われる、それからキャティと市内の名所巡りをして、キョロキョロと辺りを見まわして歩いた。大小の公園の隅やビルの間に、高い塀や繁った木でかくされる様にしたあそび場を何ヶ所か見つけることが出来た。大人達の中には、この様な公園に「汚い、危ない」と苦情を言う者がいるとのこと。だから子ども達が安心して自分の遊びに熱中できるように、目かくしをするのだと言う。

冒険あそび場と言っても、すべて同じではない。

キャティと初めて行った所は、住宅地を造成、建設した時の資材置場や作業場だったようだ。この様な所は子ども達にとって大変刺激的で、スリルがあり、エキサイティングな遊びが創れる魅力ある場所である。それは日本の子どもにとっても同様である。その頃私の勤務する学園でも、小学校の男の子が、近所の家の建築現場に入りこんで遊ぶと言う苦情がよくよせられていた。

子どもは本来冒険大好きな冒険家ではないか。幼児だって、幼いなりに好奇心強く、立派なチャレンジャーだ。それは大人にとっていたずらとしか見えないことが多い。だから、その強いエネルギーをおさえこもうとしたり、大人の都合の良い方向へ無理にでも向けようとしがちだ。子ども自身がそのエネルギーで自分のかくれた能力に気づき、それをのびすことができるとしたら、すばらしいではないか。それを可能にする場が、冒険あそび場であり、ガラ

クタ公園なのだ。面白いと思ったのは、体力がつき、最もあばれたい児童期の子ども達がやりたがる「こわす」と言う行為を、逆に、こわれたガラクタで「つくる」と言う行為に変えたところだと思う。それが自分の家を何日もかかって作る、と言う小屋づくりのあそびである。自分の力を出しきり、試し、挑戦するということは、冒険なのだ。

いろいろな公園を見て歩いて珍しかったのは、木の中に縦横にはりめぐらしたロープや網、高い木からさがった太い一本のロープ、ケーブルの様に紐につかまって木と木の間のロープを滑走するなど、当時の日本には無い「危ないあそび」の遊具(?)だった。また、すり鉢状の広い池や小高い山からカーブを描いてすべる長いすべり台、板を組みあわせていろいろな迷路の様な場所を作るものなども、結構危険で、でもどれも子ども達のあそぶ様子は見えて面白かった。一番感心したのは、大きな住宅

団地(ここは一五〇〇所帯のマンション式だった)の中央に造られた公園で、冒険あそび場や小屋作りは勿論、自然のままの所、山、池、さらに運動のできる場(ボール、自転車など)等を備えた総合公園だった。この公園には、どの家からも自動車の走る道路を通ることなく行ける。学校も保育園も商店も同じ様に公園に隣接してある。この広い場所で遊ぶ子ども数は、どんなに多くても数百人だろう。だから本当に空間がいっぱい。その中に、ゆったり過ごす親子づれや車椅子にのった人の姿もあり、気持ちやすらいだことを覚えている。

日本では、一九七四年に、鹿島研究所出版会から『新しい遊び場』と言う本が出版された。アービッド・ベンソン著、大村虔一・璋子訳のこの本には、私がコペンハーゲンで見た場所ものっている。同じ頃、日本でも冒険あそびの可能な公園が出来た。はじめての公園は、訳者の大村氏等による東京都世田

谷区の羽根木公園の一角につくられ、今も健在である。ここは沢山の太木がある斜面をうまく生かし、木の上に皆で小屋をつくり、それをあそびの拠点にしたり、いろいろな作業の出来る（時には火を燃やして食事もつくる）場所、道具小屋、動物小屋、斜面には長いロープウェー（一本の綱にしがみついて、滑車で下る）や木々の間にはられたロープわたり、大きな綱をつたって渡る、高い木から下ったロープで木に登るなど、冒険あそびがメインのあそび場になっている。入口には、自分の責任であそぶことが明記され、危険を察知したり、怪我をしない工夫をするなど、よりよく楽しくあそぶために工夫や考えることが子ども自身に要求されている。ここでも有能なプリーダーが開設時から活躍している。彼等は、あそび等のリーダーではなく、サポーター、ヘルパーに徹している。

さて、このようなあそび場は、確かに危険が多

い。デンマークでも、ここに無条件で入れるのは小学生からで、幼児は必ず大人のつきそいが必要であった。キャティと行った公園にも、母子連れが何組か来ていて、古い自動車と一緒に遊んだり、長い大きな板塀風のキャンバスに、大きなハケでダイナミックに色をぬったり、うさを抱いて歩いたりしていた。そして時には大きい子ども達の小屋づくりを見て歩いて、家の中に入れてもらったりしていた。

しかし、小学生になって突然このような公園で思いきり遊ぶことができるだろうか。キャティを見ていて感じたのは、すでに自分の責任で判断したり行動したりすることができていることや、家から外に出てすぐす時のルールがわかっていることだった。特に、冒険あそびなどには必要なことと思った。

その後、デンマークには日本の保育者のグループと訪れ、何ヶ所かの公園であそんだりした。コペン

ハーゲンには、有名な公園「チボリ」がある。チボリを皆で訪れてわかったのは、この様な娯楽性の高い、商業ベースの公園は、子どものためと言うより、大人達の公園ではないか、と言うことだった。子どもより大人の数がはるかに多く、様々なエキサイティングな乗物にのって熱狂的にはしゃぐ姿は、普段の仕事や生活のストレスを一举に解消していると思えた。多分子ども達がここに来るのは、家族と一緒に過ごす、一年のうちに一、二回の特別な日、ハレの日なのだろう。何もしなくても楽しませてもらえる。こういう日もあって良いだろう。しかし、子どもにとってそれは日常的なあそびの楽しみ方ではないと思う。デイズニーランドもその一つだろう。

さて、三十年たった今、日本もヨーロッパも子どもをとりまく状況が非常に変わった。その後デンマークに行く機会はなかったが、そこに近い北ドイ



▲ベルリンの保育園にて 暑い日のプール
とにかく広々している。子どもが少なく走りまわれる。

ツには数回行っている。ドイツは日本と同じレベルの、世界で最も少子化の国である。そして日本程ではないが、都市周辺の都市化が進み、牧場や畑、時には森も新しい住宅地や工場、官庁のエリヤになっていてがっかりする。救いは、建物をびっしり建てないこと、出来るだけ空間（空地、木や草地）を広くとること、むやみに高層ビルにしていないことである。以前から街中の道で遊ぶ子どもは少なかった。その理由はハンブルクを中心に近い古い重厚なマンションに部屋を借りてわかった。道路にそって連なって建つ建物の裏側に、建物に囲まれた広い空間があり、そこで子ども達は充分遊べるのだった。

どこに子ども達はいるのか。日本と同様、保育園、幼稚園、学校である。日本との違いは、通園パスが全く無いことと、歩くのが好きな国民性から、また道路が車道・自転車・歩道とはつきり分れていて危険が無いことで、親子が手をつなぎ、おしゃべ

りしながら登園降園する姿をよく見る。働く親の帰宅も早い。夏は日暮れもおそい。夕食の支度はごく簡単。だから芝生や草地、林、川沿いを散歩する子連れの家族や、ローラースケート・自転車・サッカーボールで遊ぶ小学生とよく出会う。しかし日中は本当に少ない。

ドイツはなかなか幼児の就園率が高くならなかった。三十年前、五十パーセント以下というのに、一クラス二十人位の子どもの数を、頑固に守っていた。

今は就園率は一〇〇パーセント近い。さらに保育園は学童クラブも兼ねていて、午後は子ども数が倍増する。と言っても、一〇〇人にはならない。今は、街中の公園より、園や学校でのあそびや生活が重要になっている。ドイツは冒険あそび場やガラクタ公園造りにそれ程熱心ではなかった。それでも園の固定遊具は、今日本でも多くなっている木造の、アスレチック風なものに早くから変わっていた。特に子

子どもを自立させ、自分の責任で考え行動することに
ついては、非常に厳しくしつけていたし、今も多少
ゆるやかになったとは言え、やはり厳しい。先生
は、四、五歳児に対しては、一緒に遊ぶことより、
よく見守る姿勢をとっている。冒険あそび風の遊具
や森で拾った棒で活発にごっこあそびをする子ども
達もいれば、一人静かにクッションに埋れて絵本に
見入る子どももいる。いろいろな子どもがいてあた
りまえ。子ども自身があそびを選び、先生もその気
持ちを尊重している。

こういう保育は、決して多人数の園では出来ない
だろう。活発でスリルに満ちた冒険あそびと同時
に、子どものいる場には静かさも必要と感じてい
る。

(元宝仙学園短期大学)



▲ハンブルクの保育園にて「仲良し」



障害をもつ幼児の保育(3)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

歩くとつなげよう その三 —歩きはじめのドラマから—

十年後の今日、コンサートに招かれて

M 今日にはNさんの歌の会がありました。最初の歌が「里の秋」。そして、手を振って手をたたいて足で踊りながら「静かねえ」と言いました。それを最初聞いた時に私の記憶がいろいろとよみがえり、この子はあこのころ

のことをどう思っているのだろうかと考えました。あつちを向いたりこつちを向いたり、みんなの方をひと回り見えるように向いて、いま歌を歌っている幸せそう得意そうなNさん！ その歩き初めを思わずにはいられませんでした。

Nさんが愛育養護学校に来たのは一九九二年の四月で、いまからちょうど十年前、Nさんが三歳のときでした。歩くことはできたけれども、ふだんはいざり這いで移動していました。歩く訓練をしないと、いまに大きくなって体重も重くなり、もつと歩けなくなるのではないかと心配していました。そのことはしばらく親にも私にも課題でした。たとえそうであっても、歩くことを訓練としてやるのでは、何かほかのところにひずみがあるのではないかと思いました。そんなことを言って、もし歩けなかったらどうするか、質問と疑問に突き当たって、私はずっとそれが頭から離れなかったのです。ある時、もう一生歩かなくともいいのではないか、楽しく過ごせばそれでいいというふうにお母さんと話しました。そうしたら、お母さんが、「私もちやうどそう考えていたところなんです。一生歩けなくとも毎日を楽しんで過ごしていればいい、とそう考えることにします」と言いました。その翌日、誰かがホールに向かってとんとん

歩く足音がしました。私は誰だろうって思っただけでみると、それがNさんで、もうお母さんと一緒にびっこりしました。だけど、その頃にNさんは、まだ来て間もない頃ですが、帰りがけに発作を起こしました。お母さんは「前いたところとはちがって、ここは刺激が多過ぎて、Nさんは静かなところが好きだから、こういううるさい所に来ると発作を起こすんです」と言いました。それで私ははつと気がついて、Nさんという時には静かな所を選んで過ごさないといけないのだと思い、そのように努めました。ある時Nさんが階段をのぼりながら、いーち、にーい、さーん、というふうに数字を言うんです。私は何かそれが非文化的でみすばらしく思えて、同じそうやってリズムを取るならば歌を歌った方がいいと思った。それで、私は歌を歌って階段の昇り降りをしました。そういうふうにして、Nさんが最初に歌った歌が「海はひろい大きいな」という歌です。私はそれを聞いてとたんに思ったことは、ほとんど歩けないような状

態だったNさんの行動範囲は広くはないはずだ。「海はひろいな大きいな」という、そういう歌を歌うのは、自分の歩くことができないう広い範囲の世界がNさんの心の中にあるんだなあと思いました。そんな時から、いち、にい、さん、しい、と唱えるのではなくて、いつも階段の昇り降りの中には、その歌を歌ったんです。それからだんだんに歌の種類が増えていきました。

Nさんはさつき静かな所でないと言作を起こすと申しましたけれども、その反面、みんなの中に賑やかにいることも好きで、来た最初の日から動けない他の女の子をトランポリンに乗せて、担任の先生が跳んでるところにNさんが這い上がってトランポリンと一緒に跳ぶことを楽しみました。だから、私は静かな所が好きだという反面、賑やかな所が好きなんだなあと思っていました。今日の小さなコンサートの中でNさんを中心にして喜んで褒めたり歌を歌ったり、賑やかな場面を本当に楽しんでいました。Nさんが選んだ最初の曲が「里の秋」だと

いうことにも深く感動しました。ずっと以前静かな所で、「里の秋」を歌い始めたことを思い出しました。そのとき「静かねえ。誰もいないねえ」と小さな声で言ったら、Nさんがそれが気に入って、二階に行くと「静かねえ」と言って、「里の秋」を歌い出すというのが二階に行く時の常でした。

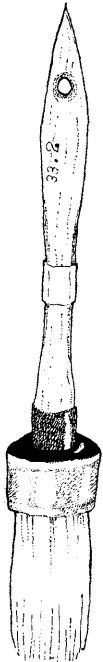
Nさんは確かにホールなどにおいて、賑やか過ぎる時には、よく私の手を引いて、二階に抱っこで行って、私がハーモニカを吹くと、一緒に歌いながら、何度も吹いてくれと要求しました。そんなことがも。う。ず。つ。と。何年も続いていました。そして今日は歌の会で、この学校を卒業したあと、その歌をちゃんと正式に取り上げて形にしてくれる専門家がいるということをとて嬉しく思いました。歌の途中から手を大きく動かしたり、それから座ったり、また立ち上がったたり、そういう動作をたくさんやって、歌だけでなくて体を動かすことをやりました。

歩行訓練を飛び越えて

F 私はNさんについてはあまりかわったことがないけれども、お母さんからよく話を聞いていました。Nさんがたびたび怒るといのが話題になりました。どういふふうになるかという、自分がやりたいと思うことがうまくできない、歩くことをはじめとしてそれができないということがNさんにはとてもつらくて、自分自身を支え切れなくて、頭を床にガンガンぶつけて怒るとか、お母さんの腕を叩いて怒るとか、そういう怒るといことがテーマになっていました。怒らなきゃならないほど、自分の思うような方にも行けないし、動けないしつていうことで大変だったんだなあと思っていたら、今日、歌の発表会では、Nさんは両足でピョンピョン跳んで、歩くどころかピョンピョン跳び上がって踊る。くるくるときれいなワンピースを翻して、ピョンピョンと踊って、両足が空中に浮かぶのはまるで

トランポリンを跳んだような感じに見えるので、あっと思っただけです。この子の場合、歩けないということから、右足、左足を交互に動かして歩くようになるということを通り越して、いきなり踊ること、歌いながら踊るといことに直結したような発達をしたんじゃないかと思いました。着実に訓練を重ねて歩くようになっていよりは、嬉しい歌をいっぱい歌っているうちにピョンピョン跳び上がっちゃって、両足が地面から離れて、そして転ぶと怒って、怒りながらも楽しさに引っぱられて成長するといふ、そういうやり方もあるんだなあって思いました。

M その歩くか歩かないか歩き始めた頃に、自分の足を叩いて、頭をガンガン床にぶつけて、「アシ、アシ」と



言った。それでね、こりゃあ、歩けないというところにあまり注目することのせいだと私は思いました。「歩けなかったって、とにかく歩けないなんて問題じゃないよ、あなたはすてきなものを持っているんだからね」ってそういうつもりで言葉をかけながら、「ちちんぶいぶいぶい。痛い所は病院の屋根の向こうのバスの停留所の向こうのお空の向こうに飛んでけ飛んでけ、ぶーいっ」て言うと、Nさんはくるつと気持ちが変わって、そうして「直った」と言って立ち上がる。それをいつも繰り返ししていた。

F お母さんも『親たちは語る』（ミネルヴァ書房）の中でそのことを書いています。

M あ、そう。

F 「私だってつらいの、飛んでけ飛んでけ、ぶーいっって言って飛んでたらどんなにいいだろうって思いますが、お母さんはそう書いてくれました。子どもは歩きたいと思うのに歩けない。そしてそのことであら

だつてるっていうことをお母さんはとつてもつらく感じていたんだと思います。その当時は。

M それは、また同時に、愛されて育っているっていうことと関連があると私は思う。痛い自分の足がもつと何とかならないかと思つても歩けない。それで怒る。だけど「ちちんぶい」ってやると、気持ちの転換ができるというのには、愛されている子どものね、特徴と思うのです。

愛される喜びが機能の喜びへと向かう

F 歩くことと愛されることは、ちょっとかけ離れているように見えるけれども、かけ離れてはいなくて、転んで歩けなくてつらい思いをした時に、気持ちを立ち直らせる力というのは、愛されることで出来てくるのではないかと思います。五月の日本保育学会大会で発達心理学会理事長の柏木恵子先生と津守真の対談の中で、柏木先生がシャルロッテ・ビューラーの言葉を引いて「機能の

喜び」と言われたけれど、機能の喜びは愛される喜びとくっついてることなんだと思いました。

M それだから、歩けない歩かないという時に、足だけに着目して、それを訓練すれば歩くようになるというふうに考えるのは誤りだと私は思う。

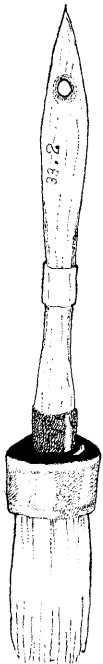
F 歩けないというマイナスの能力を、そこに引き上げれば、マイナスがなくなるんだから普通の人になれるかっていうと、そうじゃないのよ。愛される喜びなしに、機能の訓練だけでは何か偏った人間ができ上がってくるんだと思うの。

M それだからね。歩けない歩かないということもね、生活全体の喜びを与える保育、そして自分でやれることを自分でやる、その喜びを作り上げるといって保育が必要なんだと思う。私は何も機能訓練を否定するわけじゃないんでね、生活全体の中で機能訓練に相当するようなものがちゃんとなされている、既にね。これを更に本音を言うならばね……。

F いいですよ、本音をどんどん言ってください。(笑)

M 私は何回か、機能訓練に立ち会ったことがあるが、それを見ながら、保育の中でこれをやったらほかのことと一緒にできると思った。

子どもがいやがっているのを連れてきて、訓練をやるということを見て私は疑問をもった。ああ、保育がここには必要なんだと思った。今Nさんのことを考えると、一生歩けなくてもいいと思い、親もそう思い、そこまで覚悟したところから、保育というところに腰を据えて本気でともに生きた。今日はNさんの歌の会だったからとくにこうやって取り上げたけれども、何人もこういう人たちがいました。ほとんどの子どもは歩けるようになって



たし、ある子どもは歩くところまでついにはいかないこともある。

M ひとりひとり子どもは違うのであって、比較研究じゃない。

F ひとりの子どもで、あのやり方とこのやり方と比較研究をやってみることはできない。もし違うやり方をやったらどうなるかということは実証することは出来ない。

M 研究者としては辛いところなのだけれども、保育とはそういうものだね。

F 生活全体を盛り上げていくっていう保育がだいじなのね。

親の愛と知恵が輪となって人々に広がった驚き

F 子どもの生活の輪を広げていくことに、親も一所懸命になったし、歌の先生も専門家としてかかわってくれた。子どももそのタレントを持っていた。Nさんのおじ

いさんがあの会のときに、「歌だけでなく、それにもなう所作というか、体の全身の表現がとていい」と言っておられた。

M そうそう、それがとても印象的だった。Nさんはウオルフガング・シュタンケの「音と動きのワークシヨップ」(ダンス)にも行っている。

歌が好きという点ではI君も印象的です。私はよくI君と手を叩きながら炭鉱節を歌いましたよ。彼は全身で笑って楽しんだからまわりの人たちが楽しみの輪に巻き込まれた。

F 私の心に残っているのは、I君の階段を降りるときの出来事です。そのときはもう歩いていたらけれど、階段を降りることはうまくできなかった。片足ずつ出せないで、あるとき二階へ行って両足をそろえてピョンピョン、ドスドスンと、ふたつの足をそろえて、ずるっと落ちるような感じで、あの赤いカーペットを敷いた階段を降りてきたのよね。私が心配して付き添おうとした

ら、I君がわざわざ上へ戻って私のことをぐーっと押して、ドアのかけに押しつけて、自分でドストドスト降って降っていった。お母さんにその話をしたら、うちではおばあさんが一階に住んで、二階にこの子の家族が住んでいただけで二階から降りる時はすごい音がする。お母さんは、本人が自分でやらなければ気がすまないと思い、落ちても仕方がないと思ってね、すぐ飛んで行ける所まで待っていたという話をしてくれました。私はとても感心しました。それで、降りるということを克服してI君の空間が広がったと思う。

M 昨日、お母さんと、お父さんと、お姉さんと、それからいまI君の家でやっている「ウルトラの国」(音楽好きのIさんの家族を中心に毎週仲間が集まる場)を手伝っている福祉の学生さんと、四人がそろって愛育に来ました。今の話をすると本当にそうですねってお母さんが言ってお姉さんもそのことを覚えていました。今はI君はどんどん遠くまで歩いて探検を重ねています。

大きな音がしたら飛んで行けばいい、階段から落ちたら飛んで行こうと思ってはらはらしながら待っていたというI君のお母さんの言葉は、知恵と言うか愛と言うか、たいせつなこととして心に残っています。

F 親がそういうふうを考えるならばとそれをサポートしてきたのですね。ここに取り上げたNさんやI君だけでなく、多くの人が生活を盛り上げ、他の人へも輪を広げていきます。

M 私が次第に体力の限界を感じて、体を使ってこの子たちと付き合いなくなったりとき、次々に若い保育者たちがこの子たちとかかわるようになった。その中でその人たちの得たものは私とは違う別の豊かなものだと思います。そういう親が増えて、それをしっかりと受け止める保育者が増えることが障害を持つ子どもの保育の大切なことではないでしょうか。

その四



嶺村法子

区立幼稚園十四園中、十三園が小学校と併設の中央区では、ほとんどの幼稚園が小学校の運動会に参加します。春に運動会を行う小学校もあるのですが、その場合は、入園・進級した姿のお披露目程度の参加になることが多いのですが、秋に行う場合は、かけっこも団体競技も表現も、プログラムにしっかり組み込んで取り組んでいるところが多いようです。

私たちの園では、小学校と合同の秋季大運動会に参加した後、幼稚園だけの運動会「こっこ」わくわくオリンピック」を行っています。小学生の活

躍に刺激を受けて、年長組を中心にいろいろな活動を自分たちで進めていきます。

はじめとおわりの言葉、赤・白団長による選手宣誓や三三七拍子の応援合戦、アナウンス、体操、用具の出し入れ、ゴールテープ、未就園児へのお土産など、小学生への憧れから、「今度は自分たちでやりたい」と意欲が高まります。自分のやりたい係に日替わりで取り組みながら、当日の係を決めるようにしています。

また、表現のプログラムで取り上げたダンスを運動会「こっこ」のはじめの体操にするなど、大運動会の経験を形を変えて生かす工夫もしています。

魔女からのプレゼント（六月号参照）で幕開けした今年度は、「おとぎの国のダンスパーティー」をイメージして、表現のプログラムを組み立ててみようと考えました。

ト・ミ・カラ ひろば

去年の運動会では

カラー帽子に大きな黒い耳をつけ

色とりどりのカラー軍手を手に

ミッキーマウス・パラパラを

踊った子どもたち

年長組になって初めての大きな行事に

「どんなことをしてみたい？」と持ちかける

去年の経験を思い出し

「玉入れやりたい」「リレーやりたい」

と 口々に意見が出る中

「ジンギスカン踊ろうよ」

と 自分たちで振り付けを考え

遊戯室の舞台でダンスショーを

繰り広げていた女の子たち

「うん、ジンギスカンがいい！」

と 他の子どもたちも賛成する

そこで どんな格好で踊りたいか

それぞれ考えてくることにした

「ピーター・パンになりたい！」

「私は、ティンカー・ベルがいいな」

「ぼく、忍者！」「私も忍者！」

「私、魔女になろうかな……。ねえ、一緒に魔女やろうよ」

「お姫様に決めた！」

「私は王子様やりたい！」

子どもたちは 思い思いに

自分のなりたい役を出し合い

二人、三人とかたまりになっていった

さていよいよ 衣装の相談です

「魔女の帽子はどんな形にしようか」

「ホーキもいるよね」

「マントは黒がいいよ」



◆◆◆◆◆ To・Mi・Kara ひろば ◆◆◆◆◆

「お姫様のスカート、水色がいい」

「前のうみ組さんみたいに リボンをくるくる回して踊りたいよね」

「王子様の剣を作るんだ！」

「ピーター・パンは 緑の帽子に緑の洋服着てるんだよ」

「ティンカー・ベルの羽、何で作ればいいのかあ？」

こうして

あちらこちらで衣装作りが始まった

うみ組二十三人中 男の子が八人

その八人中 七人が忍者になった

忍者の衣装はどうするのか

と思っていたら

ともくんが

「忍者の着物作りたい」と言ってきた



▲ジンギスカンを踊るピーターパンとティンカーベル

ト・ミ・カラ ひろば

新聞紙で型紙を作り 体に当ててみる

「こんな感じていいかな」

「うん。ぼく黄色の着物にする！」

不織布に切り込みを入れ

赤色の布テープで襟の部分を作り

鉢巻きを帯代わりにして腰で結ぶ

とたんに シュシュシュシュと

すり足で走ったり

手を組んで

忍者のポーズを決めたりする

ともくんの姿を見て

他の八人も 自分の好きな色を選んで

忍者の着物を作り始めた

ともくんは

一学期に苦労して覚えた折り紙の手裏剣をこと

もなげに作り終え

もう手のひらに乗せて飛ばしている

翌朝

「忍者になろう！」

と九人で誘い合い

引き出しから着物を出して身につけると

遊戯室の大型積み木で修行の場を作り始めた

たけちゃん

三角積み木を長く並べたトゲトゲの道を

落ちないように早足で渡っていく

まみちゃんは巧技台とビームを組み合わせた急

傾斜を手を使わずに登っていく

だいちゃんは

その巧技台の上から

半回転しながら飛び降りたり

後ろ向きに飛び降りたりする

そして私は

ト・ミ・カラ じろば

「忍法跳び箱の術！」

と 幼児用跳び箱の六段を跳んでみせる
忍者たちは次々に並んで

いろいろな跳び方に挑戦する
あつくんは

「忍法横跳びの術！」

と叫ぶや 閉脚のまま

手をつけて体をひねって着地する

私は調子に乗って

「忍法竹馬の術！」

と 昔取った杵柄を披露する

子どもたちも負けずに

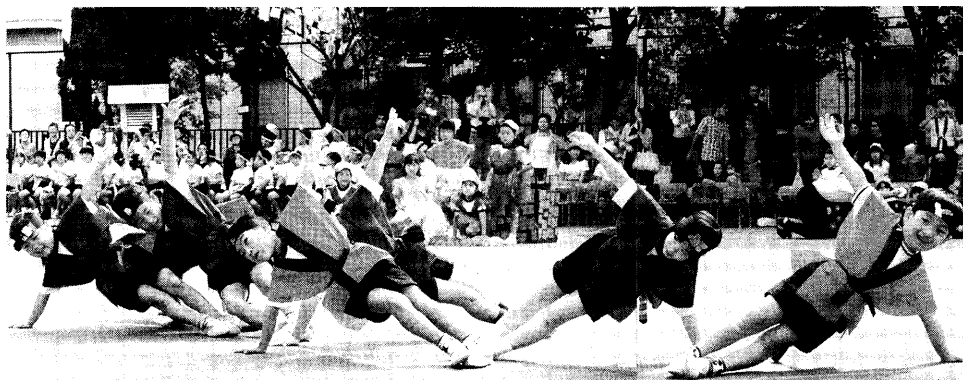
縄跳びをもってきて

「忍法後ろ跳びの術」だの

「忍法バツテン跳びの術」だの

自分たちができるようになった跳び方を

得意顔で見せ合っている



▲忍法並びの術が決まって、にっこり！

←←←← TOMIKARA ひろば →→→→

忍者たちは

九人全員が腕立て側臥の姿勢をとる

「忍法並びの術」

真ん中に一人が立ち

四人ずつ手をつないで左右に開く

「忍法花びらの術」

と 新しいポーズを考え

自分たちで名前を付けて

運動会で披露した

ポーズが決まって 拍手喝采！

担任も やれやれひと安心

後はみんなで

ダンス！ ダンス！ ダンス！

のりのりジンギスカンで

“おとぎの国のダンスパーティー”も

無事お開きとなりました。

保育者は、小さな種をまく人である。同じ種を
まいたつもりでいても、一人ひとり違う色・違う
形の芽が出てくるところに保育の楽しさがある。

そして、子どもたちと一緒に作り上げていく活
動の中で、保育者もまた自分らしさを発揮する機
会を与えられる。その色や形はそれぞれに違って
いても、子どもたちのはれやかな笑顔を生み出す
ことが、保育者の自己実現の道であると思う。

(中央区立月島第一幼稚園)

追憶・追認・追想のあの頃

亀高 京子



ものごころついてから小学校にあがるまでの私は、外遊びを思いっきり楽しんでいた。当時は、博多の郊外にある父の勤める会社の社宅に住んでいた。

おままごとやお人形ごっこ仲間に入ったこともあるが、かくれんぼや鬼ごっこ、縄跳びの方が好きだった。それよりも、男の子達と原っぱや丘を駆け廻る、陣取りが最も魅力的だった。五、六歳から小学四年生

位まで十二、三人はいたと思う。年長者がリーダー格で、小さい子にはオマケと言って、それなりのハンディをつけていたし、喧嘩の仲裁役もしていたように、適度のまとまりを持っていた。

この頃の大事件は、戦争ごっこの最中に、鉄条網で右手首の下を六センチほど切ったことである。七十年経った今も、うっすらと傷跡が残っている。網の破れ

から潜って登る最後尾にいた私は、滑り落ちてきた二人とともに転がり落ちて網にひっかけたらしい。

リーダーが血の噴き出る私の右手を高く持ち上げて、皆で我が家までついて来たことと、母の驚いた顔までは覚えていたが、その後の記憶は無い。大泣きしたのか？ 叱られたのか？ などとも思い出せない。

びっくりしたのと、痛さを我慢するのに精一杯だったのだろう。ただ、鉄条網の中に入ることは禁止されていたこと、一歳半年長の兄は初めから此の仲間には入っていないし、女の子は私とあと一人だけだった。私は好奇心旺盛で、お転婆だったことは確かだ。

家では、キンダーブック、こどものくに、こどものともをはじめ童話の本や外国の絵本に親しんだ。お気に入りの本を母にねだって繰返し読んでもらい、覚えているところを一緒に声を出す喜びを味わった。そして、妹に絵を指さし、母の真似をして語り聴かせた。

あれは夏祭りの夜だったのだろうか。家族で浴衣を

着て歩いていたら、お月さまが私について来るのだ。立止まっても横へ歩いて後戻りしてもついてくる。

常々「誰も見ていないところでも、神様はちゃんと見ていて下さるのよ」との母の言葉が頭をよぎった。その日、私はオズルの嘘をついていた。お八つに外から帰った時、石鹸で手を洗うきまりだったのに、そんなに汚れていないからと、さっと水だけで洗い、「石鹸できれいに洗った」と言ったのだ。ああ、神様はお月様の中から見ていらしたんだとドキドキした。家に入って窓をあけると、月は私の真正面に動かさずにいる。声に出さずにゴメンナサイと謝った。大抵のことは「どうして?」「何故?」と、質問する私だったが、このことだけは秘密にしておいた。

昭和七年、小学校入学は母の希望で市内の有名小学校に汽車通学することになった。とは言っても博多駅までのたった一駅である。登校は女学校に通う近所のお姉様方と一緒に、下校は母か、ねえやのお迎えだっ

たが、五月になると私は独りで大丈夫だからと言いつ張って、左手首に発車時刻の時計の絵を書いてもらい帰宅した。私にとつては大冒険の気分だった。

昼時の博多駅では駅弁売りの声が賑やかで、乗客から「お嬢ちゃん、独りで通つてるの？ えらいわね」と賞められたり、アイスクリームを勧められたが、よその人から食べ物をもらうことは厳禁されていたので、「有難うございます。でも次の駅で降りますから」と教えられた通りに従った。そして、今に大きくなつたら、あの一番おいしそうな駅弁とアイスクリームを買おうと決めていた。

東京時代

夏休みになつて、父の転勤で東京に引越した。今度は学校まで五分の近さだった。授業は全部楽しく、唱歌と体操が得意だった。

学芸会に千里君と千鶴子ちゃんと三人で「ひばり」

を歌った。千里君が「東北の田舎ではね、イトエを反対に言うんだよ。だからピーイーピーイーじゃなくて、ピーエピーエピーエとさいずるひばり——」と終わりでまで歌ってみせた。皆が面白がつて真似をしたため、元に戻らなくなつて先生をあわてさせた。後年テレビでクレージーキャッツのメンバーに桜井センリ君を見つけて驚くとともに懐かしかった。リレーの選手で活躍し、肋木登りやドッジボールに熱中した。

ドッジボールの場所とりに朝早く出かけた時、学校の前の文房具屋の老夫婦（今の私よりもはるかに若いはず）が、お日様を拍手して拝んでいる姿が印象に残っている。

父は大正デモクラシー期に学生生活を過した進歩的な人物であった。旧制高校時代の級友の妹だった母を見染めてプロポーズしたとのことで（伯母の話）、亭主関白の面もあったが、中々の愛妻家であった。母に習い事を続けさせたり、料理や編物の本を翻訳してあ

げていた。兄妹三人には希望を聞きながら本を選んでくれた。何故? と思うことは先ず自分で考えてみる、次に事典(小学生用)で調べることが教わった。辞書や事典、図鑑をひもとく楽しさは今日まで継続している。

母はハイカラな面と士族の娘として嫉られた古風な面とを備えていた。シフォンケイキやシュークリームのお手製のお八つ、私と妹の服をデザインして誂えたり、三人のセーターを様々に工夫して編んでくれた。

日曜日の晴れた日には、ピクニックや遊園地、博物館、展覧会などに家族中で出かけ、雨の日にはミツキーマウスの映画や家でゲームに興じた。春休みには高原への一泊旅行、夏休みは約一ヶ月を神戸の垂水にある伯母の別荘で、いとこ達と海に遊んだ。この時、東京の父に、せっせとお手紙を書いた。

両親ともに教育熱心だったが、主として父からは知育を、母には情操・徳育を受けたと感じている。

当時のインテリ中流階級の典型だったと思うが、今、ふり返ると、両親の愛情に包まれた心豊かな楽しい情景が次々に展開する。

遠出しな日曜日には教会の日曜学校に通った。青学院のお兄さん先生に英語の歌を習ったり、椅子とゲームなどで楽しかったが、先生のお話によく質問する子だった。

歳末の渋谷駅で、美しい讚美歌の声に心うばわれた。紺の制服と社会鍋、救世軍のことをきいて、将来は是非とも入りたいと憧れた。

私の小学校入学直前から既に満州事変が始まっていたが、周囲は平和で社会道徳もしっかりしていた良き時代だったとの感が強い。

青島時代

三年生の秋に父がチンタオ(青島、中国山東省の港湾都市)に転勤になった。兄が地球儀で場所を教えて

くれた。チンタオは一八九八年にドイツの租借地となつて要塞を構築、第一次大戦初期に日本が占領したところで、建物や街並はドイツ時代そのままを留めていた。ビール会社勤務の父が、ドイツ人の創設したビール工場への転勤を希望したらしい。

四日間の船旅で港に近づいた時、カソリック教会の塔が青空に映え、緑の樹々の中の赤レンガの住宅など、美観に胸をときめかせた。

青島第一小学校の校長先生は中村八大さんのお父様だった。鉄筋校舎に広いグラウンド、おらかな雰囲気、担任の先生を中心に元気で仲の良いクラスで楽しい毎日だった。ある日、少し知恵おくれの女の子をかからかう二人組の男子をこらしめようと、仲良しお転婆グループで作戦を練って決行し、遂に謝らせた。先生に「義を見てせざるは勇無きなり」と賞められて私達は気炎をあげた。真面目な兄と違い、私は放課後もドッジボールや友だちたちのお喋りが楽しくて、人力車

のお迎えを随分待たせたものだ。

アカシアの花の甘い香りがただよう春、忠の海や湛山で過ごす夏、運動会に張りきる秋、冬は零下七度位の寒さだったがスケートを楽しんだ。また、チームの温かい室内でレコード鑑賞や読書に

ふけた。少年少女向きに文学全集などは三分の一で読んだら、続きを自分で創作する習性があった。いくつかは本の過程、結末と合致したが、作者の文章に感心の溜息をついたものだ。キュリー夫人伝や科学関係の本で、「研究」の大切さを知ったが、どんなに科学が進歩しても、潮の干満を変えることは出来ないのではないかと考えたりした。私をとりこにしたのは、山本有三著『心に太陽を、唇に歌を持って』で、全頁を暗誦した。

青島には中国人はもとより、ヨーロッパ諸国、白系



ロシアなど多くの民族が住んでいた。中国女性の“てん足”や“泣き女の葬列”をはじめ諸民族の生活様式、生活文化の多様さに興味を覚えた。素朴な疑問は、同じ土地で生活しているのに此の相違は何に起因しているのだろうか？であった。この強烈な異文化接触が後年の生活文化史研究へのきっかけとなった。

十二年の七月七日、盧溝橋で日支事変が勃発した。

「女と子どもは内地か満州に避難せよ」の命令で、母と妹との三人は大連経由で東京へと向かった。しかし、妹が船中で体調をくずしたため門司で下船し、私は知人の家から箱崎小学校に通うことになった。小学校卒業までの短期間であったが、この時の担任の曾木先生は、私の最も尊敬し思慕する先生である。眉目秀麗、凛々しく、生徒を公平に愛する先生。何よりも生徒が自発的に考え学びたくなるような学習指導法は抜群であった。

クラス全員のあこがれであったが、私にとって先生

は完全に“初恋の人”であった。妹の病気はすぐに回復したが、私は断固として東京行きを拒否した。

女学校入試もあるため、私の希望はかなえられて、最初の社宅に移り住むことになった。

ここで六年ぶりにケガをした鉄条網に再会した。当時から住んでいた小母さんに“お医者さんで六針も縫ったこと、母がどんなに心配したか、男の子をつれて両親が謝りに来たことなど”を昨日のこのように聞かされた。また、「この木に登ってご機嫌だったわね」と言われて思い出した。私の記憶は、この時に反芻されて確かなものとなった。

翌年、日本の軍隊によって治安も復活したので、青島に戻ることになった。

出発する朝、もう簡単には登れないほど伸びた木を見上げながら、「また会いましょうね」と別れを告げた。

(元東京家政学院大学)

雑草を観る、育てる

徳野 雅仁

いつのころからか、畑に入ってますが目がいくのは、野菜ではなく、爽やかな雑草の緑や、昆虫の活動ぶりであることに気づきました。天敵が数多く確認できれば虫害の心配はなく、雑草がのびのびと元気に育っていれば草花や作物も健康に育つからです。こうしていつも、畑を見渡し、日々、変化する雑草の美しさをのんびり眺めることが、私にとって穏やかなくつろぎの時間になっています。

わずか十坪弱のミニ農園ですが、野菜、ハーブ、果樹、花木、草花がところ狭しと育つなか、ススキをはじめとしたさまざまな雑草が作物や草花とほどよく調和し、緑の世界をつくっています。

十月。夏草が色づきはじめるころ、秋野菜が育つ株元や、収穫を終えて整理され、土が露出した畝上には、新しく芽を出した雑草が、次々に誕生しています。ホトケノザ、ハコベ、カラスノエンドウ、オオイヌノフグリなどです。秋は除草はまったく不要です。冬にむかって作物はどんどん大きくなりますが、雑草は大きくなりません。寒さに負けないように生長を止めて身を低くし、越冬準備に入ります。作物がいかなる雑草にも負けないのはこの季節です。身を低くして雑草は、大地を覆い、霜害や北風を防ぐ体制をとります。ハコベに似たノミノフスマは、一株で直径一メートルの放射状に、大地に張りつくように枝を伸ばし、広く畝上の他の作物の株

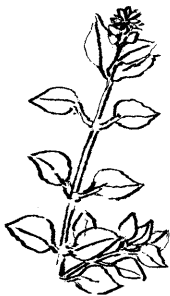
元まで守ります。これらの雑草が上にむかって生長するのは春になり花期を迎えるころですから、除草の必要はなく、むしろ、土壌の乾燥や、寒害、そして病害の発生から作物を守ってくれている点に注目したいと思います。

自然農園では、何が芽生えるかも楽しみのひとつです。なかには、風に乘って運ばれてきたもの、鳥が落としてくれたもの、また、地中で眠っていたものが時を経て芽を出すこともあります。見覚えのない芽を見かけたら摘みとらずに育ててみると、それが美しい花を咲かせるヌマトラノオであったり、ホオズキであったり、また、サンショウやユズやムクゲやヤマザクラであったりと、おもしろい出会いがよくあります。

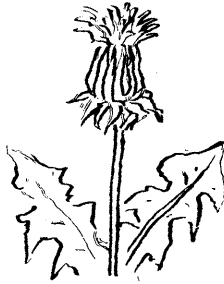
雑草は子どものころ、一番の遊び相手でした。カヤツリグサやナズナ（ペンペン草）、エノコログサ（ネコジヤラシ）。葉を細かく裂き、髪を結んで遊ぶカモジグサ。穂を結んで茎を通し合い、互いに引き合せて遊ぶオヒシバの相撲遊び。クローバーで花輪をつくり、枯れたアカザの茎でつくるとても軽い息災長寿の杖など、夢や想像力を育んでくれたものです。

子どもたちが野菜を育て、収穫する喜びを体験しながら、雑草を通じ、自然との触れ合いによって何かが心に残ってくれるのではないかと思っています。

（イラストレーター イラストも筆者）



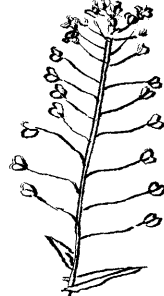
ハコベ



セイヨウタンポポ



シロツメクサ
(クローバー)



ナズナ
(ペンペン草)



自分づくりを支える

B男と私の二年間

吉田 澄江

先日、小学校の公開研究会に参加した。三年生の授業を見た。その中に、幼稚園での二年を共にしたB男の姿があった。授業の中で、友達の意見に共感しつつ、自分なりの意見を述べていた。授業の後、廊下を歩いているB男の肩を後からポンとたたいた。

「あつ、先生！ 来てたの？ 気が付かなかったよー。びっくり」

「元気だった？ 立派に発表してたね」

「うん。でも、あーびっくりした」

そう言いながら、B男はとてもいい笑顔で私の顔を見た。ここに自分は価値ある存在として



だという自信から生まれた余裕が彼全体から醸し出されていた。そして、彼の自分づくりに寄り添った二年間を思い出した。

四歳の頃

—虚勢を張ることで自分を保つ—

入園当初からB男は照れ屋で感情を素直に出せず、悪気はなくても乱暴な行動を取ってしまう様子が見られた。根はやさしく正義感もあるのだが、何かあると口より先に手が出てしまう。また、幼い部分もあつて、はしゃぎ過ぎると誰彼かまわず抱きついたりするようなどころもあつた。何をするかわからないところが近寄りたいたい雰囲気を感じさせ、特に同じ生活グループになった女兒は、一緒に過ごさなければならぬお弁当の時間がいやだと涙ぐんだり、登園を渋ったりした。男児の中にも、B男の動きに魅力を感じつつも、

怖がって近づこうとしない様子が見られた。ほかの幼児が怖がるのもっとも部分はあがるが、B男にとつてもこういう自分の表し方が本意ではないと感じた。慣れない環境下で過ごすことへの不安感、自分への自信のなさ等が、他者とかかわろうとするときにも出てしまうのではないか。そこでB男をまずは丸ごと受け止めるかかわりを基本とし、怖がっている子に対してもB男のよさを伝えるようにし、その保護者に対しても、子どもの気持ちを受け止めつつも、一緒に落ち込んだり怖がったりしないで、B男は仲良くなりたくてちよつかいをかけてくるのかもしれないこと、正義感が強いなどいい面もあることを知らせていくことで不安感が取り除けるのではないかと伝え、園でもそのような、視点を変えるきっかけになるかかわりを試みた。

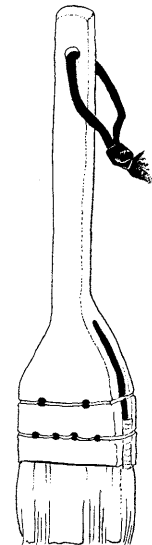
B男を取り巻く子どもたちのB男像を変えると



共に、B男自身が園での安心感を基盤に、遊びが充実していくことで、素直に思いを出すことの心地よさを感じ、また他者にも思いがあることに気づき、お互いに思いが通じ合うことの嬉しさを体験して欲しいと願った。

そんな中、B男を怖がっていたK男の母親が、園の外でもかかわるきっかけを作るなどして、K男が「怖くなかった。仲良くなれた。また遊びたい」と、K男のもつB男像を自ら変容させ、以後、園でも一緒に遊ぶようになった。

B男はぶつかりつつも次第に遊びの中にかかわる相手を増やしていく。B男にとって、K男をはじめとするクラスの何人かに受け入れられたことは、園での生活に安心感をもたらしたようである。新しい環境には慣れにくい面のあったB男が「幼稚園に行きたい」と家で言うようになった。



***遊びの楽しさがかかわりを生む（七月）**

共通のイメージが楽しさになって

何日か前に読み聞かせをした『たろうのひっこし』の絵本に刺激を受け、B男、K男、N男、M男らがゴザを抱え、園庭に出て行く。砂場に三枚のゴザを並べ、その上に四人が座り、「たろうのひっこしごっこ！」と笑い合う。何をやる訳でもないのだが、一緒の場にいることが楽しいらしく、とにかく通る人通る人に「たろうのひっこしだよ！」と声をかける。そのうち、砂場用ままご道具を持ちだし、ごちそうを作り始める。「カレーにしよう！」「ケーキも作ろう！ できたら



先生食べに来てね！」と張り切って作る。

一緒にする心地よさを感じて

片付けの時間。B男、K男、S男が、「子どもたちだけでテール運んだ！」とテラスにいた教師に報告に来る。いつもは片付けだよと言っても絶対やらないB男が興奮気味に目を輝かせている。

「すごい！ それじゃ、これもできる？」と、落ちていた空き箱を渡すと、「できる！」とK男。つられてB男も「できる！」と応じて片付け始める。

一緒に遊んで楽しかった経験を積み重ねていくことで、その後多少のトラブルが発生しても関係を修復してまた一緒に遊ぼうと思ったり、自分の思いどおりではない場合でも、友達の考えたことをやってみたら結構おもしろいことがあると分か

るなど、関係づくりに関して前向きな気持ちを持つようになると思われる。

今まで片付けをしなかったB男が片付けをした背景には、意気投合しているK男と遊びの楽しさを共有し、友達と一緒にのこをする嬉しさが積極的な行動のエネルギーとなったことがあると思われる。

五歳の頃

—友達という心地よさを感じて—

他者に対してすぐにはうちとけることのできなB男であったが、年中組の一年間で、少しずつ人とかかわる嬉しさ、楽しさを味わえるようになってきた。とは言え、他者への自己の表し方の一つなのであろうが、B男は年長組になって、叩くなど、相変わらずすぐ手が出るところはあった。しかし、むやみやたらではないことを周りの



子どもたちも認識し、B男自身は手を出すことがよくないことだということを頭では分かってきている。また、してしまつた自分の行為について、逃げずに受け止め、自分の心に問い返していくということができるようになつてきた。そんな中で、A男というかけがえのない友も得ることができた。

*ケンカするほど仲がいい

— かけがえのない存在として思い合う —

A男の母親の連絡帳から（七月）

A男が「今日もB男君とケンカした」と言うので（しかも、いつもA男が泣くというようなことを言い）「一日に一回はケンカするんだ」と言つたときに、「いつもケンカするのにどうしてB男君と遊ぶの？」とわざと聞いてみると、「ケンカするほど仲がいいからだよ！」という答えが返つ

てきました。ウーン負けた、質問の答えは、母の方がうまくありません。（中略）七夕の短冊は先生に書いていただいたそうですね。A男は最初「Bくんのらんぼうがおさまりますように」と書くかと思つたそうで「でもますますやられそうだからやめた」と言つていたので大笑いしました。そつちの方が子どもらしくておもしろかつたな、とひそかに思いました。

この連絡帳を読んで、ケンカしつつもなお、A男はB男をかけがえのない存在として必要としてゐるということが感じられた。だからこそ、A男の母親のちよつとした意地悪な質問にもはっきり即答できたのだと思う。A男がB男を必要としてゐるように、B男もまた、A男をかけがえのない存在として大切に思つている。それは、様々な場面での忠告を素直に受け入れているB男の姿から



も窺われた。

また、A男が、一見乱暴者とも思われるB男をこれ程までに受け入れたのも、この連絡帳のように子どものかかわりや相手に対する思い、トラブルまでも「おもしろい」と感じられる母親の支えがあつてこそそのことと思われた。

*欠席した友達を思う

一人に支えられている自分を感じる――

B男の母の連絡帳から（十二月）

A男君がずっとお休みだったとき、何となく肩の力がないので、どうした、また誰かとケンカしたか？ と聞いたたら、「違うよ、A男が一口寝る前も、今日もお休みなんだよ……」

それで、A男君に五枚くらい紙をつぶしてお手

紙を書き、ファックスしたことがありました。本当に真剣に書きました。（中略）そんなB男に、心の成長を感じました。そして、確実に人への思いやりの心が育つて来ているのだな、と感じた出来事でした。ふざけんぼで、乱暴で、照れ屋で、なかなか優しい心を素直に表すことができずにいるB男なのに、友達に認められて、思いやられて、親切にしてもらっているうちに、自然にB男にも身につきはじめているのでしょうか。人と人とのかわりつて、本当に大切なことですね。B男共々身にします。B男を通しての中で、いろいろな事に感謝の毎日です。





A男の母親からも、B男のファックスのことに ついての連絡帳が来ていて、誰も自分のことを心配してくれていないのでは……と、具合の悪いのも手伝って気落ち気味のところに、思いがけず大好きなB男からファックスが送られてきてとても嬉しかったこと、お互いあまり文字の読み書きができない子同士が、それでも相手を思いやって文字を綴って送り合ったことについて書かれていた。A男との関係の中で、B男も思いの通じる嬉しさを、これまでに幾度も経験して来たのだと思う。

二年間を振り返って

二年間のB男の関係づくりや心の成長を追って、B男が自分で納得しながら新たな事柄や人との関わりを受け入れ、今までの自分を壊しては新たに再生していく姿を見ることができた。そこには不器用ながらも着実なB男の歩みがあった。

た。

幼児期には、一見頑なな幼児に、他を受け入れさせようと無理強いらしりすることよりも、気持ちをほどこきながら、場面場面で自分と出会わせ、壊しては再構築する自分づくりに徹底的に付き合うことが大切であると思われる。その中で、自己の可能性も拡大され、それと共に他者をも受け入れられるようになると思われる。

私は、小学校で出会った彼の余裕ある笑顔に、幼稚園でめいっぱい自分のドラマを展開した二年間が、彼自身も気づかないであろう彼の生き方の根っこになり得たことを感じ、感慨を覚えると共に、彼がとてもまぶしく見えた。人を育てることにかかわった者としての、地味ではあるがじんわり大きな喜びであった。

(岩手大学教育学部附属幼稚園)



三木成夫といのちの世界

吉増 克實

(三) いのちのかたち、いのちの波

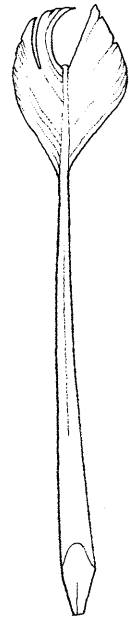
ヒトのからだを越えて

昭和四十三年に『ヒトのからだ』が出版された後、昭和四十四年からすがたかたちの解剖学の完成を目指して書き続けられた解剖学総論は、昭和五十二年「生

命の形態学」と題されて発表されます。しかし、この著作は総論を終え、各論が予定の三分の一まで進んだ時点で中断され、後は草稿のまま残されました。それには、昭和四十八年医学部の解剖学教室から芸大へと職場を移したことが関係しているかもしれません。い

ずれにせよ、この間に、ヒトのからだの成り立ちを明らかにするという解剖学的関心は次第にヒトのからだを越えて拡がり、脊椎動物から無脊椎動物へ、さらに植物へ、そして様々ないのちのかたちそれぞれに独特なあり方とともに、いのちとそれを取り巻く世界との密接なつながりへと移っていったように思われます。

生命の形態学の総論の表題を見ればすでにその関心の広がりのおおきさは明らかです。ここでは、第一章は生の原形と題され、宇宙の根源形象・らせんとリズム、生の波・食と性の位相交代の二部に分けられ、第二章は植物と動物という表題のもと、第一部は生物の祖先・進化とは何か、第二部は植物的と動物的・遠の観得と近の感覚、第三部は植物と動物の体制・積み重ねとはめ込みに分けられています。第三章は動物の個体体制の題で、植物器官と動物器官・内臓系と体壁系、両器官の形成・体制の分極、からだの極性・分極



の意味するものに分けられています。この総論はそれ自体としてさらに深められ展開されて、『胎児の世界』という著作としてまとめられることになるのです。

いのちのかたち

脊椎動物以外の生命の構造、生命のあり方は三木の目にはどのように映ったのでしょうか。実はそこにも様々な極性関連が認められるのです。たとえば、脊椎動物と無脊椎動物とは、背骨の有無という以外にも、互いに極性をなす対称的な構造が見られます。つまり脊椎動物では腸管の背中側に神経管が形成されるのに対して、無脊椎動物ではおなか側にできるのです。それどころか発生の初期に受精卵が分割を繰り返すう

ち、一方がくぼんでいき内外二つの細胞の層からなる袋になります。この袋の底が抜けて腸管が開通するのですが、もとの入り口がそのままになるのが先口動物と呼ばれ無脊椎動物になり、新しくできた方が口になる動物が後口動物と呼ばれて脊椎動物になります。

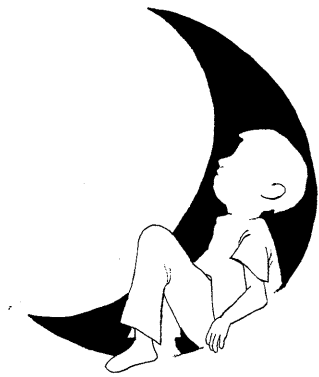
このような構造の極性の違いがそれぞれのいのちのあり方になんか意味を与えているのか、三木自身はそのことについては何も述べていません。しかし、もつと原始的な生命のあり方の違いは植物と動物のあいだにあります。植物は、栄養生殖の植物性機能だけからなるのに対して、動物はそれに加えて感覚と運動の動物器官も備えています。それは大地や大気と直接交流して独立栄養を含む植物と、栄養を植物やほかの動物を食べることによるしかない従属栄養の動物との違いでもあります。「植わった物」としてその場で栄養生殖を営むものと、餌と異性とを求めて「動く物」であるものとの違いです。

動物と植物との構造には極性的な対立がみとめられます。動物から腸管を引き抜いて、それを手袋を裏返すように裏返したものが植物の構造です。腸の絨毛に当たるものが根や葉ということになります。植物は内臓が世界と直接接していて、そこにはどんな隙間もありません。むしろ世界の一部、世界の生物学的部分と比べていいほど世界とひとつになっているのです。その場の大気や土地のほんのわずかな湿り、微妙な光と陰を厳密に反映します。植物の生態はその土地の気候風土をもつとも忠実に反映しています。実際、気候帯の区分はそこに生えている植物の区分で表されているのです。植物は環境に合わせて自分のすがたを変えることすらするのです。ゲートは梅鉢藻が水中では糸状の葉を示すのに空気中ではつながった丸い葉を示すことを述べています。わたしも極端に乾燥した環境で育ったラベンダーが針状の葉をしていたのが、十分な水分を与えられて育つうちに次第に通常の柔らかな丸

みを帯びた葉に変わっていくのを見たことがあります。

また、植物には動物のもつ厳密な個性がありません。ふれあう植物同士がくっついたり、時には違う種類の木がくっついて一本の木のようになることもありえます。植物の生長は細胞が「積み重ね」られていくことによって起こります。植物の生長は大地と大気とおのれに同化していくことです。そこには原則的に成長の限界はありません。地球大のバオバブの木もありうるのです。

植物を裏返しにして、蠕動運動のための筋肉のサポーターを巻き、それにさらに移動運動のための筋肉のサポーターを巻いたものが動物です。動物はふれあっても肉体同士が同化することはありません。同じ種であっても個体が異なれば拒絶反応が起こります。動物の成長はあらかじめ外枠が決められた中に、次々と細胞が分化し「はめ込まれ」ていくというかたちで



おこります。動物は植物性器官の内臓を通じて宇宙と交流しています。それは宇宙を体内に閉じこめているのです。そこでは肝臓と腎臓という出入り口の関所によって内部と外部とが厳しく境界づけられています。それは、動物を構成する細胞が個体としてはっきりしたまとまりを示し、それ以上分割できない全一的なものとしてひとつの中心を介して世界と交流しているように見えます。それは大宇宙に対して自分自身の中心をもった真の意味での小宇宙なのです。

ゲートは動物よりも植物に生命の本来のすがたを見

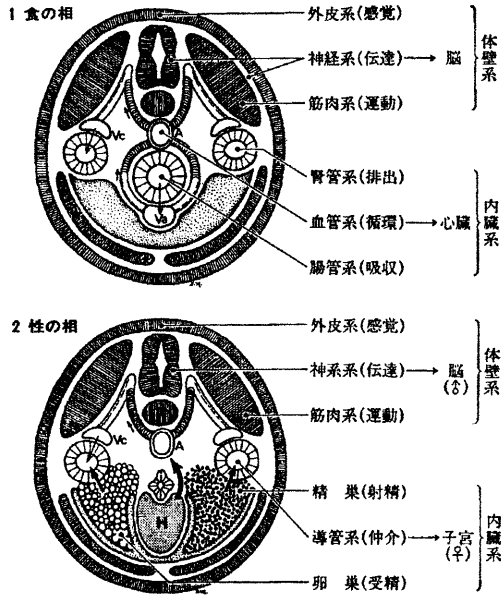
ていました。死ぬ直前に書かれた友人宛の手紙にも次第に強まる植物への関心を述べています。三木は人間の直立姿勢に、重力の方向に素直に、大地の天空に体を伸ばす植物の姿勢との共通性を見ています。動物は地上を横ばいする不自然な姿勢をとらざるをえなかったのが、人間に至ってはじめて地球の中心に向かって直立する正しい姿勢をとることができるようになったと言います。植物はその姿勢をずっと以前に完成していたのです。

前回にも述べたことですが、三木は、動物が個性性を強めたことを、植物の宇宙と一体になった暮らしと比べて宇宙とのつながりが希薄になったことと関係しているように思っていたようです。しかし、植物ではこころはまだまどろみの中にあります。「こころ」が目覚めるには動物性器官としての「からだ」の目覚めが前提になるのです。そして人間にいたってこころが目覚めるのですが、それは宇宙の中に共感表現の新た

な中心が目覚めることなのです。その場の宇宙が目覚めることなのです。ただ人間ではやがてこの「こころ」の中心が「あたま」によって篡奪されることによって、人間生命の宇宙からの疎外が始まることになります。このことについては別のところでお話するつもりです。

食と性の波

動物のからだの植物性器官は、栄養を中心とする時期と生殖を中心とする時期、つまり食の相と性の相とその構造を変化させます。たとえばヤツメウナギやサケなど、一生が自分のからだを成長させる時期と生殖のたけに行動する時期にはつきりと分かれるような生物では、生殖期になるとともに個体を維持するはたらきは失われものを食べなくなります。それに応じて栄養摂取のための腸管は萎縮し、おなかには卵巣や精巣の性物質ではち切れそうにふくらむのです。植物性器



▲図 食と性の体制
(三木成夫『胎児の世界』より)

官である内臓は拍動しています。三木はこれを内臓波動と呼びました。右の図は二つの時期のからだの構造の違いを表しています。植物性器官の中心は食の相では心臓に、性の相では卵巣と精巣とが向き合う中心、

つくる無性生殖の世代と、胞子から生まれた前葉体による有性生殖の世代とが交代する世代交代が認められますが、これはとりもなおさず同じ生物の食の相と性の相との交代にほかなりません。反対に動物の食の相

子宮にあります。植物ではこの二つの位相は、茎を伸ばし葉を茂らす成長繁茂の相と、花を咲かせ実を実らせる開花結実の相がひとつの植物に積み重ねられたかたちとして現れています。

実はこのような二つの位相は、単細胞生物にも認められるのです。アメーバなどの単細胞生物では、自己分裂によって自己増殖を続ける増殖相と、二つの個体が接合して核物質を交換する接合相とが区別されません。多細胞生物のシダでは、胞子を

と性の相も体細胞の分裂による成長の時期は無性生殖の時期、性細胞の減数分裂と受精の時期が有性生殖の時期と見ることが出来ます。このように、食と性の波は、単細胞生物から多細胞生物の動物に至るまでかたちを変えながらも繰り返し現れます。それはあらゆる生命を支えるいのちの波と言うにふさわしい根源のリズムなのです。

生物リズムと四大リズム

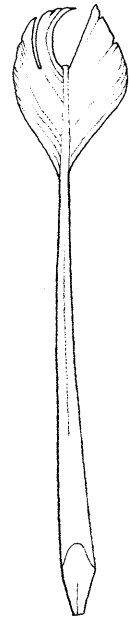
からだの植物性器官の変化、内臓波動としてみられる食と性の波は、太陽の周りを回る地球の産み出す四季のリズムと密接に関連しています。それはまず地球の表面を彩る植物の成長繁茂、開花結実の波としてあらわれます。春のさくら前線、秋のもみじ前線は地球と植物との生命の交流の現れなのです。季節とともに訪れては去る渡り鳥の群れも、産卵と子育ての場所と成長の場所との往還を表しています。サケやアユやウ

ナギが生まれ故郷の川上から海へ出てそこで成長期を過ごした後に産卵のために故郷の川へとさかのぼるところとはよく知られています。それはむしろ季節と密接に関係しています。そしてその場合生まれた場所は生殖を終えた魚たちが死ぬ場所でさえあるのです。食と性と、そして死も、地球の季節を織りなす生命の営みの一部なのです。

動物の産卵が季節的なリズムに織りなされているという以上に、海に住む様々な動物の産卵が潮の満ち干のリズム、つまり月齢と密接なつながりをもつこともよく知られた事実です。南の島のカニやゴカイの一種などが一年のうち特別な満月の夜に一齐に産卵のために大移動を始めたたり、海の底から海面に一齐に浮かび上がってくるということがあります。ある種の魚が産卵のために海岸に押し寄せたり、ウミガメが産卵のために砂浜にあがってきたりすることも月の満ち欠けと密接なつながりをもっているのです。

こうした月のリズムは人間のからだにも古い生命記憶として刻み込まれています。生まれたばかりの赤ん坊は月のリズムで寝たり起きたりしますが、それはやがて太陽のリズムに覆われていきます。女性の月経周期も太古のむかし海に住んでいた時代の潮汐リズムの名残なのです。七日を一区切りとするリズムがあることもウサギの歯に刻まれた年輪で確かめられています。一週間が七日であることにもヒトの体に刻まれた生物リズムに基づくものであるらしいのです。

ヒトのからだには地球の自転が作り出す昼夜のリズムと関連する生物リズムが認められます。睡眠覚醒リズムに代表されるこのようなリズムはおおよそ一日の周期を示すために概日リズムとよばれています。一日より短いリズムの中でよく知られているのはレム睡眠と関連した睡眠の九十分周期のリズムです。そのリズムは覚醒している昼間にもわたしたちの意識しないと



ころではたらく続けているのです。

わたしたちの意識の届かない生命の奥底で生命のリズムと地球のリズムとが響き合っています。三木はこの二つのリズムの響き合いについて次のように述べています。「サケが故郷の川へ産卵のためにさかのぼっていく。雁が南の餌を求めて大空を渡っていく。これらが季節の風物詩として定着していることはだれも否定できない。ゴカイの類が海底の食の営みから海面の性の営みへと大挙浮上するさまを見て、南方の原住民は暦をつくる。それほど生物リズムと四大リズムは一致する。…こうして生物リズムを代表する食と性の波は、四大リズムを代表する太陽系のもろもろの波に乗って無理なく流れ、そこにはいわゆる生と無生の違

いこそあれ、両者は完全に解け合って、ひとつの大きなハーモニーをかもし出す。まさに『宇宙交響』の名にふさわしいものであるう。

パンタレイ

ギリシアの哲学者ヘラクレイトスは、パンタレイ、「万物流転」と言っています。パンタレイのレイは流れるという意味ですが、リズムという言葉もこれに由来します。その意味ではパンタレイは、万物はリズムをもつ、万物は拍動するという意味でもあるのです。

三木はまたこう述べていました。「この原始の生命球は、従って『母なる地球』から、あたかも餅がちぎれるようにして生まれた、いわば『地球の子ども』と行うことができる。この極微の『生きた惑星』は、だから引力だけでつながる天体の惑星とはおのずから異なる。それは『界面』という名の胎盤をとおして母胎すなわち原始の海と生命的につながる、まさに『星の胎

児』と呼ばれるにふさわしいものとなるであろう。そうすると四大リズムと響きあう生物リズムは、そもそも母なる地球から分け与えられたものであったに違いありません。ひとつひとつの生命の中に、生命記憶として宇宙のリズムが刻印されています。根源をなす宇宙リズムが、ひとつひとつの生命の中で繰り返し再生更新されているのです。

(東京女子医科大学第二病院)

編 集 後 記

梅雨の合間の一日、幼稚園の観察に参加しました。園庭の桜の木の下では、たらいに水を入れて、数人の子どもが昨日掘ってきたじゃがいもを洗っていました。おしゃべりしながらもたわしを持つ手は真剣です。「ぼくも洗いたいな」「いいわよ。こちら（のたらい）もどうぞ」と、先生はそれまで空で置かれていたたらいにもバケツで水を注ぎ込みました。すると途端にこのたらいのまわりまで生き生きした場が広がりました。こうして次々に空のたらいに水が注ぎ込まれ、三十分ほどすると、五つのたらいのまわりに十六人の子どもたちがいました。

男の子が二人駆けてきました。手に持っているのは柄の付いたたわしです。「これでもいい？」「それは靴を洗うときのだから……」。どうやらたわしも不足気味です。先生の予想を超えた人気のようなのでした。

別の遊びに散っていつて誰もいなくなつたたらいの水を、先生が一つ流すと、空になつたそのたらいのまわりに静けさが戻りました。やがて、賑わいの場は少しずつ小さくなつていき、一時間が経つたころ、じゃがいも洗いは終わりました。

この間、子どもたちは入れ替わり、その数も変わりました。先生は、その場に見合うように、水を入れたり流したりして、たらいの数を調節していました。そのたびに、賑わいの場は伸び縮みしてまるで生き物のようでした。

(A)

幼 児 の 教 育

第一〇一卷 第十号

(二〇〇二年十月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十四年十月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六二三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

編集委員 森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

最新刊



21世紀保育ブックス⑪

保護者の要望をどう受けとめるか 苦情解決・第三者評価に求められる保護者への説明責任

小笠原文孝 よいこのもり第2保育園

延長保育、休日保育、夜間保育など、子育て支援として園が果たしている機能は、依存性の強い親にしていくことと、決して同義語ではないのです。「子育て支援」とか、「共に育児を考える」ことの根底には、園側の説明責任と応答責任、そして行動責任をもつことがあります。そして親自身が社会的自己責任を獲得して、それを双方が認め合う上に成り立つものだと言えます。園と保護者とが共に育ち、支え合う方法を探ります。

B6判 168頁 定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス⑫

保育所と幼稚園～統合の試みを探る

吉田正幸 幼児教育21研究会

保育所と幼稚園は、同じような年齢の子どもを教育・保育する施設であることから、かなり以前から一元化が言われてきました。福祉的な要素の強い保育所であっても、教育的な要素の強い幼稚園であっても、子育て支援の機能をどう持つかという点では共通しています。言い換えると、子育て支援という枠組みにおいて、保育所と幼稚園の垣根はほとんどありません。つまり、より大きな意味があるのは、保育所や幼稚園の施設ではなく、そこで発揮される機能なのです。すなわち、保育の理念に行き着きます。本書では、これまでの一元化の試みと、これからの多元化・統合への道を探ります。

B6判 208頁 定価：本体1,200円＋税

既刊本

- | | | | |
|-------------------|--------------|------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 | ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真実 共著 | ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探求 | 柴崎正行・田代和美 共著 | ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 | ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 | ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレーベル館

『個と集団が育ち合う園生活』 (全5巻)

編著者 柴崎正行 (東京家政大学教授)
川合貞子 (東京家政大学助教授)
大豆生田啓友 (関東学院女子短期大学講師)

最新刊

- 第1巻 『0・1歳児クラス運営のすべて』
- 第2巻 『2歳児クラス運営のすべて』
- 第3巻 『3歳児クラス運営のすべて』
- 第4巻 『4歳児クラス運営のすべて』
- 第5巻 『5歳児クラス運営のすべて』



判型 B5判 各224~248ページ
定価：本体各1,900円+税

●本書の構成と特徴

- ①生活する姿から
その月にあった子どもの生活する姿から様々なエピソードを提示。
- ②生活の見通しと保育者の願い
その月の生活や遊びの方向性をどう見通したかを〈読み取り〉〈願い〉〈援助〉の視点で具体的に書きあらわした。
- ③指導計画の作成と見直し
個と集団の育ち合いを生み出す実践事例と結びつけたその月の指導計画を示した。
- ④保育のアイデア
育ち合いを生み出すために知っている便利なこと、配慮することを具体的に示した。
- ⑤編者のコメント
以上の実践記録に対して、編者がどう読み取ったか、個と集団の育ち合いを生み出すためのポイントについてコメントした。

個と集団の育ち合いを生み出すための指導計画を求めている保育者のみなさんに贈ります。

一人ひとりの子どもを生かしながら、クラスもスムーズに運営したいという保育者の切実な願いに込めるための参考書です。

キンダーブックの
フレール館